

浄土

1982-12

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回 日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別及承認雜誌）第三二五号
昭和五十七年十一月二十五日印刷 昭和五十七年十一月 日発行
第四十八卷 十二月号



一年を振り返って

「一年の計は元旦にあり」とひそかに年頭の誓いをたてたのが、ついこの間のように感じられる。あれこれと雑事に追われながら、今年も早や師走を迎える。気がついてみると街角の小さな店でお正月用の「かるた」が売られている。テレビの発達、戸外レジャーの隆盛で、かつてはタコあげ、羽つきと、正月遊びの三羽鳥であった「かるたとり」もすっかり影がうすくなってしまった。百人一首は古典的競技として放映されるが、一般家庭では、小さな子供たちとの団らん、簡単な絵入りのものが用いられるだけである。その中で伝統的なかるたとして、今から百五十年くらい前の江戸時代末期にできたと伝えられる「犬棒かるた」がある。ことわざやたとえを集め、いろはの四十八文字を頭としたもので、古くは「いろはたとえかるた」と呼ばれていた。明治時代になって最初の「い」の札が「犬も歩けば棒にあたる」で始まることから、「犬棒かるた」と呼ばれるようになった。

一つ一つの札には、江戸時代からの庶民の知恵と、時々
の風習がよみこまれていて、日本人の心がこの中に伝え
られているといっても過言ではない。「論より証拠」は
なにやらロッキード裁判を思わせるし、「聞いて極楽見
て地獄」は甘言で人をつる求人広告に通ずる。流行を追
うことに夢中で「粋は身を食う」とやら、サラリーマン
金融に追いまわされることとなる。「老いては子に従
う」など、現代の倫理とのずれを感じさせないでもない
一句もあるが、ほとんどすべてが、現在の社会にも立派
に通用する警句となっていることは驚くべきである。
いろはの四十八文字は、よく知られている通り、『涅槃
経』に見える「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為
楽」の四句の意味をとって弘法大師が、仏教の中心思想
を、

色は匂へど 散りぬるを わが世たれぞ
常ならむ 有為の奥山 今日こえて
浅き夢みじ 酔ひもせず
と簡略に示されたものである。深遠な仏教教理と日本人
の心との接点を見る思いがする。

十二月号



是の如く精進にして威神はかり難からんに、我が作物の国土をして第一ならしめん。

——『無量寿経』 歎仏頌

目 次

真の念仏者……………松 島 定 宣……(2)

——法然上人ご生誕八百五十年を省みて——

除夜の鐘に想う……………布 村 定 雄……(7)

◇◇◇一年の思い出◇◇◇

日中友好に重点・前進座の法然劇も盛況……………高 橋 良 和……(12)

① ② ③ ④

念仏は釈尊出世の本懐……………村 瀬 秀 雄……(16)

紀 行

晩秋の観音巡礼……………江 目 達 雄……(18)

エッセイ

落葉の頃……………木 下 隆 一……(26)

<連載>

後鳥羽院と御製『無常講式』四……………宝 田 正 道 ……(29)

浄土句集……………一 田 牛 畝 選……(24)

<表紙裏・巻頭言> 一年を振り返って……………佐 藤 良 純

念仏ひじり三国志 (103) ——法然をめぐる人々……寺 内 大 吉……(38)

表紙 大西耕三画

カット 大正大学美術部

真の念仏者

——法然上人ご生誕八百五十年を省みて——



○慶讃の年を省みる

昭和五十七年も後わずかで暮れようとしています。今年は元祖法然上人のご生誕八百五十年慶讃の年でありました。浄土宗一宗をあげて、総大本山、各教区、各寺院で賑々しく慶讃の諸行事や大法要がくりひろげられました。中でも、その人徳が偉大す

松島定宣
まつしま じょうせん

(大本山増上寺執事
小田原市常光寺住職)

ぎて小説にも映画にもならないと言われてきました元祖様を真正面から取りあげて、前進座が劇「法然」を上演したのは、史上はじめてのことで、本年中に上演すること六十八回、六万人の観客に大きな感銘を与えました。

又増上寺の慶讃行事に参詣した芝学園の生徒の中には、「八百五十年たって、今なおこんなに沢山の人が集まって、こんなに盛大に誕生祝いのしてもらえ

る法然上人という方は、よほど偉い人だったんだなあ」と感嘆するものもありました。

たしかに浄土宗の檀信徒をはじめ、多くの方々に法然上人の存在とその偉大さを知ってもらう為には、大へんに有意義であったと言えましょう。

然しこれらの慶讃行事によって、どれ程元祖さまのよみしたもう真の念仏者になってきたか、育ったろうかと反省してみますと、私たちは自らを省みて、何と応えられるでしょうか。

先月はじめ、増上寺で開催されました浄土宗布教師大会の席上、全国各地から代表の方々が意見発表をなされた時、聴衆の中から次のような質問的発言がありました。「私は今の寺に住職して四十四年になります、真の念仏者はやっと一人しか育ちませんでした。この間五重相伝会や授戒会も度々開き、いろいろな行事、法要を通じて懸命に檀信徒教化にあたってきました。それなのに真の念仏者が育っていない。これはどうしてでしょう。どうしたらよいのでしょうか」と。

この問題提起は、今の私たちが、真剣に考え、深

く反省すべき所についています。開宗八百年、善導大師千三百年、それに今年のご生誕八百五十年と、この十年足らずの間に三度も大きな仏事がいとなまれ、各寺々で檀信徒の皆さんもこれに協賛して、記念法要に参列、総大本山や誕生寺等に団参されたり、本堂庫裡の新築、ご本尊や諸仏像安置、造立に喜捨されたり、各種の催し物、大会も次々と開催され、多くの人々が参加しました。それはすべて、元祖様のみ教えを信受する為のものでありました。念仏の教えを宣布するのは、真の念仏者を育て、人々をして念仏を喜び生きること、そして最も幸福な人生たらしめ、社会を浄化する為であります。だのにこれらの大会や団参に参加し、説教もきき、寄付も精一杯したのに、われひと共に真の念仏者になれと確信できる人が何人あるでしょうか。

何故みんな念仏者になれないのでしょうか。元祖様のみ教えに随順して「念仏申す」ことに徹底しなかったのではないのでしょうか。いや「念仏申すこと」が全ての中心におかれる事なく、行事や法要の中で、「念仏申すこと」が最重大事として取り組ま

れていない、「念仏申すこと」が何よりも肝心と受けとられなかった事にあると思われるのです。

慶讃の諸行事や法要においても、念仏を申す時間が少なくなっています。総じて僧俗共に念仏を申さなくなっています。かつては私の生れた村などでは、朝夕には、鉦鉦や木魚をたたいての念仏の声が、寺や家々から聞こえていました。全国ではなおこのような地域もあるでしょうが、その数は極めて少ないと思われるます。今なお山口県の大日比では、かの三師のご教化が生きていて、檀信徒の家々で念仏する声がきこえ、読経はせず、只発願文をよんで、只一向に念仏のみしてしていると聞きました。

ともあれ、念仏を申さなくなったのでは、念仏者が育つ訳はないのです。念仏を申しましょう。

元祖様のみ教えの究極、つまるところは、かの一枚起請文にありますように、「智者のふるまいをせずして、只一向に念仏すべし」であります。だのに説教、法話など頭で理解せんとする聞法布教が主であり、檀信徒も寺にお参りするのは、墓参りの為で

あり、お経をあげて、塔婆供養などをする為であって、念仏を申す為ではないのが実情でしょう。

このように反省してみると、みなが本当に幸せになり、生死のまよいを超えて、尊き人生を完了する為には、どうしても元祖様のみ教えに従って、しっかり念仏申して、真の念仏者にならなければなりません。このことこそご生誕八百五十年の最も大切な事であります。今年をその出発点として、みんながみんな真剣に念仏申し、本当に念仏をよろこび、念仏申し申し生きぬいていく真の念仏者になるよう精進しなくてはならないと強く思います。念仏を申しましょう。

○元祖然上人の念仏のすすめ

元祖様は、ご存知のように、三十年の長きにわたる厳しい御修行、御苦勞の末、念仏の一行をもつて末代の私たち凡夫が、生死のまよいを超えて救われゆく道、念仏を申し申し生きる喜びを体得なさって以来、「往生の業は念仏を先となす」と只々念仏す

ることを説き勧められました。

当時の人々は、その口称念仏の教えを千天に慈雨の如きよるこびをもつて受けとめ、信じて、専ら念仏して生きる中に真に生きぬく力を与えられました。だから法然上人の教えを多くの人々は「専修念仏」と受けとり、元祖様没後五十余年にして世に出て、法華経を広布されんとした日蓮上人が「日本国中一人もなく法然房が弟子とみえけり」と嘆かれた程、念仏の声が津々浦々まで広がっていききました。

元祖様は自ら日々六万の念仏を申され、晩年には更に一万を加えて、日課七万遍の念仏を申されています。慕い集まる人々にも「只念仏申せ」とことある毎に確信をもつて勧めておられるのです。

「常に仰せられる御詞」をみましても、次のように「念仏申せ」の語が必らずと云つてよい程ついています。

「現世すぐべき様は念仏の申されん方によりてすぐべし。念仏の妨げになりぬべからん事をば、いとい捨てべし」と、何事も念仏申す事を基準として、念仏生活に役立つものはこれを行じ、妨げになるも

のは捨てよ、善惡選択に迷う時も念仏を申して、念仏を喜び申される方をとれと教えられ、「万事を捨てて念仏を申すべし」と勧められています。

又、「たとい余事をいとなむとも、念仏を申し申し、これをする思いをなせ、余事をしし、念仏すとは思ふべからず」と、一日一日為すところ全て念仏申すことで為し、念仏で貫ぬかれるようにすることこそ、元祖様のみ教えに随順する真の念仏者といえるのであります。

即ち、「人の命は食事の時せむと死することとあるなり。南無阿彌陀仏とかみて、南無阿彌陀仏とのみ入るべきなり」と食事も念仏の中になし、「念仏申してしましても腹の立つ心がさまさまに起ります。どうしたらよいでしようか」と尋ねた人には、「散乱は世にわるきことにて候。かまえて一心に申させ候え」と、怒るなどの散乱の心は本当に悪いことであると厳しく誡めた上で、それも腹が立てば立つままに念仏を心にかけて、「必らず一心に念仏申しなさい」と、念仏申す事で散乱の心も超えられるとの確信の上に立って一心に念仏申すよう勧めておられます。

更に又、「(心の)散れども名を称すれば、仏願力に乗じて往生すべし」とこそ心得て候え。ただ詮ずるところ、おおらかに念仏申し候が第一のことにて候也」と、ただ素直に、専らに仏の願力を信じて、おおらかに、雑念にこだわらず、念仏申すことが第一の大切な心得であると、お示しになっています。

そして、弟子達や訪ねくる者に常に仰せられたのは、「名号を聞くというとも、信ぜずば聞かざるが如し。たとい信ずというとも、称えざれば信ぜざるが如し。ただ常に念仏すべし」という言葉であります。あまり念仏を申さなくなっている私達は、この「信ぜざるが如し」とのお言葉を鏡として反省しなければなりません。

念仏を忘れず、常に念仏を申す為には、必らず一日に何千遍と日課をきめて、それを絶対守る決意で精進しなければなりません。かくして、真に元祖様のみ教えに生きる念仏者となるのであります。

何遍と念仏の数をきめるよりも、時間をきめてやる方が、修し易いでしょう。普通の速さで二十分で一十千五遍、一時間なら三千十千五遍は称えられ

ます。

あい共に、「只一向に念仏すべし」の御遺訓に従い、しっかり念仏を相続し、念仏申すことを生活の中心にすえて生きぬいて参りましょう。

◇ “浄土句集” 欄投稿要項

多くの方々のご投句をお待ちしております。大
本山善導寺の新法主になりました一田先生も大
変にはりきっておられますので、振るって作句し
て下さい。

一 ハガキ一葉に四、五句づつお書き下さい
投稿先――

。千812 福岡市博多区中興服町10-14

正定寺 一田牛畝先生宛

。千102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

法人上人讃仰会

除夜の鐘に想う

ぬの
布村定雄
むら じょう ゆう

(東京・麴町心法寺住職)

年の瀬を迎えて今年もいくたりの方々をほとけ様の国へお送りしたのだろうかと思う。野菜を毎週のように御供養だといってお寺へ届けて下さったSおばあちゃま、娘一人残してゆくのは辛いと言っていらしたが、忽然として往かれた。M氏とF夫人は共に献体をなさっていられた。従って一年間は御遺骨は帰らない。医学のためとはいえずぐに埋葬出来ないのは何か寂しい。又、町内のT氏は町の役員として皆のお世話をよくなさった。癌で手

術をされ快気祝いをPホテルでされた。その折、「おめでとうございます」と申しあげたが内心ご自分の余命を知っていられたのだろう。それから半年だった。気風のよい江戸ッ子のA氏は毎月奥様の命日に早朝お参りに来られていた。元気な声がお寺の玄関にひびき氏の来訪が知れた。このA氏の葬儀もすんで思い出を少しお話しした。「三つの秋」という八木重吉の詩を読んでさしあげた。



きょねんは

水の音がうれしかった

おとしは

空がうれしかった

今年の秋は

まっ赤なさくらの葉がうれしい

A氏は下駄屋さんの主人。戦後は下駄がよく売れたそうだが、今は下駄を履く人は少ない。私には折にふれ杙の下駄を持参されたので当分の間下駄に事欠かない。「何の変哲もなく一生を送って」と家人は言われたが、その平凡が有難かった。「三つの秋」はそのことを詩っている。人の一生に大きな喜びの日はそう多くはない。ちょっとした出会いに心打つものを見出すのだ。

心法寺は東京の千代田区に残された、墓地の隣接であるお寺では唯一の寺院だ。寺を開かれた然翁聖山上人は、三河国で家康の知遇を得、共に江戸まで従軍し供養僧として仕

えたと言われる。晩年、郷里へ帰ろうとした上人に家康は八町四方の寺地を与えようとした。しかしこれを辞退しそのうちの二千坪を受けお堂を建立したという。これがほぼ現在の地域（麴町六丁目）に当る。家康はさらに寺領千石を与えようとしたが開山上人は「衣食易ければ僧侶が怠惰に流れ勤労をおこたるようになる。希くは心法寺を十方檀越の法界寺とし、江戸へ移住の人々のための大衆の寺院としたい」とこれを固辞したという。本堂の左手に歴代様の墓所があるが、塔を拝して私も聖山上人のこの言葉をこころしうていかなければと思う。

今次大戦で諸堂一切が焼失、本尊阿弥陀如来のお身体のみ防空壕にて難をまぬがれた。私の子供の頃、焼野原にあつて小さなトタン張りの仮のお堂の中にこの本尊様がすこぶる大きく感じたものだった。瓦が境内の一面に山を成していた。文字通り瓦礫の山だった。正月にはその上で風をあげ、夏には夜空に両

国の花火をみた。先住の父は、その瓦の山を一人で築いた。鉄の車輪のついた頑丈なトロツコで照る日も雨の日も引いた。そんな無理から胸を病んだ。私もそれを引継ぎ中学時代から六年をベットで過した。父は氣胸という療法で肺に空気を入れ肺を圧しつぶしたが、私は胸郭整形手術で肋骨を取り片肺の機能をなくした。療養所のはずれ、林の中に靈安室があり、その電灯がつくのを何度見て過したか。最近、新たに新薬が出たとか、四半世紀前とはずいぶん治療法も様変りしたことだらう。

焼跡の中に残されたもう一つ、それは鐘。延宝四年と記されている。つい先日、文京区のこんにやく閣魔様(源覚寺)の鐘がアメリカより帰り再建されたと新聞で読んだが、心法寺の鐘にも、ある話がある。市ヶ谷近く六番町に住まわれる元国鉄本社旅客局長の柳井乃武夫氏は、昭和四十六年四月号の文芸春秋に「やまのて線」という文を載せておられる。

麴町六丁目に心法寺というお寺がある。その玄関前の植込みの中に鐘がひっそりと置かれている。戦争中、供出のために鐘楼からおろしたところで戦災に遭い、いくらか火はかぶったがそのまま終戦を迎えたのだそう。延宝四年の鐘銘には、「武州豊嶋郡江戸市谷之庄山野手」の字が見える。延宝といえは四代将軍家綱の頃から下町に対する山の手という言葉は、古く江戸時代から使われていたことはたしかだ

と記され(中略)、続いて、

大正四年には上野・神田間の電車線路が間通したので環状運転が実現した。この頃から電車の前頭に行先を示す方向板が掲げられるようになった。終戦後、にわか方向板にローマ字を入れることになり、その時に部内略称のヤマテを使ったため、ローマ字の方向板がもとで、本籍と関係なくヤマテの呼び名を普及させる

結果となった

最近、元慶応大学教授であり幅広い活躍をなさっていられた今年亡くなられた池田弥三郎氏の「魚津だより」という著書に、奇しくも柳井氏との出会いが記されていた。

……わたしが出した「山の手線」という小著は柳井さんの協力がなかったら一人では出来なかったはずで、その頃、柳井さんは交通公社に移っておられた

これにより、柳井氏は国鉄におられた頃に先の文芸春秋の文を書かれ、池田先生の著書はその後に出されたことが知れる。ともかく、柳井乃武夫氏が心法寺の鐘の山野手に注目され、それを根拠に、戦後使われていたヤマテ線を変更、現在のヤマノテ線（YAMANOTE LINE）となさったのだ。私なども学生時代に使われていたヤマテ線が耳の底に残っている。ついヤマテ線と言葉に出してしまうが、境内の鐘に対してもヤマノテ線と言いつつ慣わしている。数年前、柳井氏より

達筆のお手紙を頂戴した。「近くに住まっているので時々お寺に立寄り鐘に会う。由緒ある鐘のこと大切に」とあった。

秋の彼岸中に、参拝旅行にこ一諸したことのあるK夫人が浄土にゆかれた。長野善光寺へ参詣した時七十五歳でかくしやくとしておられたが今年は米寿だった。志賀高原でのお元氣な姿の写真を再見してからお通夜に伺った。一諸にお参りし宿に泊り、共に山を見、川を見た方の葬儀はことのほか心やすらかにお勤めができた。K夫人の人柄への思いが告別の中ににじみでたからかも知れない。

本年の檀信徒皆様との旅行は日光東照宮、湯元、水沢観音だった。久しく開基様墓前に参拝したいと願っていたが、ようやくそれを果たすことができた。十月初旬の東照宮はまだ紅葉には早かったが、三百五十年祭の記念の年に当り、五十年に一度の本殿参拝が許されており、家康公に直々にお会いした思いだった。明治以来、神田、麴町地区の多くの

寺院が他区へ移されていったのに、この寺のみ残されたということは家康公との因縁がそうさせたのだろうか。夏には蟬の声に読経の声が負けてしまいうらいだし、皇居の森に近く種々の鳥たちが庭に寄ってくれる。このコンクリートジャングルの中であって、柿、栗、ぶどうが実を結び、ほてい草がうす紫色の花をつける。春夏秋冬の小さな自然が境内を訪れる者をホッとさせてくれる。

今年四月より、紀野一義氏の「法話会」が毎月、この本堂で持たれているが、氏の近著「法華経を読む」には、壮大な宇宙の話が載っている。それによると「私たちの太陽系は時速百六十万キロの速度で銀河系宇宙を廻っている。それでいて太陽が銀河系宇宙を一周するのに二億年もかかる」とあり、宇宙的尺度で人生をみることがいかに大切かを説いていられる。こんな億という単位の年数を考えたと、山の手線の開通、家康の江戸幕府、法然上人御生誕さえもほんの先ごろのことにな

ってしまう。そして人の一生の一瞬を思う。しかし、お寺のことを思っただけだったおばあちゃん、献体をなさっていらっしやったお二人、平凡にあたりまえに生きてと言われたA氏、それぞれに一日一日を積み重ねた大切な命だった。私にとって沢山のことを教えてくれた方々だった。御法要の折に自然と涙するのでそれがよくわかる。前にも出した八木重吉の詩、

すべて

もののすえはいい

竹にしる

けやきにしろ

そのすえが空にきえるあたり

ひどくしずかだ

やがて除夜、ビルの林立するこのあたりにとも鐘の音がきこえる。私もいつか境内に延宝の鐘の音を聞きたい。

◇◇◇一年の思い出◇◇◇

日中友好に重点・前進座の法然劇も盛況

高橋良和

今年の浄土宗は、ふり返えてみて中国へ友好運動に重点がおかれたといえる。昨年来つづいている日中友好の諸計画がどんどん進捗して、いよいよ十一月には西安の香積寺の善導大師の雁塔に、善導大師と、宗祖法然上人の夢中の対面の木彫が見事に完成をみた。

この彫刻は、文字通り日中親善の結集であって、中国側の彫刻家が、その背景を制作し、こちら側からは、仏師松久朋琳氏が、善導大師と法然上人像を作成して完成、それがさる十一月十五日に西安香積寺の雁塔に見事に安置されたのである。

本宗からは武田宗務総長はじめ局長、そして日中友好

の浄土宗協会の人々、また一般の教師も参加して盛大な法要を中国僧の出仕で修行されたことは、高僧善導大師讃仰のこよなき事業であったといえるだろう。

それを記念して、日中両国の出品による書法展も西安で開かれたし、一応日中友好の大師讃仰の記念事業は、今後さらにつづくとしても、その事業は成果をあげたと思う。

本宗とともに、各宗でも本年は非常に積極的に計画をすすめたので、臨黄という臨済黄檗の両宗でも、中国への親善団体をおくり、臨済禅師の臨済塔の修理を完成して、全真言宗では弘法大師の修行の地である少林寺が、

寺のすがたがなく、一面の田圃であるところから、その復旧に真言各派が協力し、二億円の献金をしてそこに堂宇を建てるのがすすめられていて、中国仏教協会も、その建設に協力することが約束されたという。

天台宗では、中国の天台山国清寺に、宗祖伝教大師の顕彰碑を建立する計画をすすめていたところ、中国側の要望で、天台智者大師と、道邃、行滿兩大師の顕彰碑を建立し、さる十月にその除幕式を百五十名の日本天台宗の使節団が赴いて行った。

まさに日中友好は、各宗競って現地でのその遺跡の修理と、復興に力を入れたのである。

本宗ではさらに写経に力を入れて、それも香積寺に安置されるなど、各宗の日中友好運動のなかでも、本宗のそれは他宗を凌駕するものがある。

しかし一步宗内事情をかえりみると、本年はかなり安定性を欠く一年であったといえる。昨年高島寛我門主が遷化し、そのあとの後任門主の推戴に時間がかかり、そのことについて宗内事情で非常に不信感をあたえたことはまことに遺憾である。

数回にわたる門主推戴委員会の開催という、いわゆる信仰にして象徴の門主を選ぶこの委員会が、ややもすると対立があるかの様相を示したことは、未だ且つてその例がない。その上、推戴後においてもなお好ましからざる動きが起つて、宗内事情を暗くしたことは、まことに残念であったといえるのではないか。

結果的には増上寺の藤井実応門主の就任が決り、仮入山後、十一月五日、知恩院の奉告法要、そして浄土宗の新就祝賀会があつて、これでその形はついたが、しかし宗内事情は、安定性を欠いている。

このようなことは、一体誰の責任なのか、法然上人お誕生のよき年であるだけに、なにかしら淋しい。

この知恩院門跡、浄土門主の推戴決定とともに、本年は本宗の大本山法主の遷化があつた。すなわち筑後善導寺の宮本文哲法主の遷化である。その後任の法主には一田善寿師が円満に決定し、藤井実応増上寺法主の門主就任については、その後任に中村康隆師が決定し、一田法主は、十月十三日に、中村法主は十一月二十四日に晋山式を行なったので、これで総大本山の門跡、法主はいづれも揃つての越年となる。

宗祖法然上人のお誕生八百五十年のよき年、四月には総本山知恩院をはじめとして、各大本山でその慶讃法要が執行された。

何分にも宗祖のお誕生ということで、各総大本山の法要とも活気あるものであり、特に青少年運動が、今後宗内でどのように発展するか、この機会にのびることを期待したい。

特にその誕生地である岡山県の誕生寺では、本年度をその慶讃法要の年にして四月から年内ずっと参拝者がつづき、大計画であった華頂殿の新築も見事に完成をみて、さらに信徒会館の建設計画をすすめるという、予想以上の参拝者であり、それは真宗関係の団参もあって、まさに法然上人讃仰の人々の参拝はつづいている。

そしてもう一つの霊蹟である岡山的那義山菩提寺では、記念事業の一つとして、宗務当局が力を入れることによって、この菩提寺に研修道場が建設される計画がすすめられていることをつたえたい。

菩提寺は、那義山の中腹にあり、法然上人の少年時代の修行のところであるが、ここに研修道場をつくり、教

師の研修、あるいは青少年、そして、地方の人々にも開放して、法然上人のお心をつたえるという、地元奈義町でも大いに仰讃しているので、明年度には、その完成がみられることになるようである。

地方寺院におけるこのお誕生八百五十年の慶讃法要は、非常に盛んに行われていることと、特に本年はこの法然上人のお心を通して幼児、児童青少年への教化が、積極的にすすめられたのは、なんともうれしい。

それに対応して、視聴覚教材を通した布教にも力がそそがれ、映画も制作された。松岡プロダクション作の文化映画「いのちを考える」の四十分の上映がある。劇映画ではなくて、文化映画の部類かもしれぬが、とも角も宗務の教化方針であるいのちを考えるというテーマをとりあげた映画であり、地方で盛んに上映されている。

また一方演劇の部門では、五十五年の歴史をもっている劇団前進座が、法然劇を公演したことである。主役の法然上人には、前進座の幹部俳優である中村梅之助氏があたり、すばらしい演技力と、前進座のスタッフを動員して、七月十七日京都南座で開演し、さらに東京の読売

ホールとつづき、いづれも超満員の盛況となったし、その地元教区はもちろん近隣教区でも、観客動員に協力して溢れるばかりの盛況であったのは、日ごろこうした動員力が、あまりお得意でない本宗が、すばらしい団結をもつにいたった成果であり、前進座でも、その成功に感謝していた。

さらに明年は、大阪公演、そして名古屋公演を経て、いよいよ全国縦断公演を行うことになっている。地方の反響も絶大で、本年からその公演を待ちかねているということである。

お誕生八百五十年におけるすばらしい事業であったといえる。

知恩院がさる四月の慶讃法要中の一、二日間の予定が、一日雨のために中止したが、その一日三回を中心として、中村雁治郎、朝丘雪路などの出演で、いわゆる座外のページェントということで、浄土曼陀羅を公演したが、これも時代的な布教、教化のねらいとしては、時代的なねらいであったのは、前進座ともに新しい計画であった。

こうした視聴覚的な布教とともに、新しく浄土宗が、

テレビの放映をはじめたことである。今、年間通じて宗教番組としてのテレビを放映しているのは、比叡山延暦寺のみであるが、我が宗でもさる十一月六日から、たとえ関西中心であっても読売テレビから、「心に花を」のタイトルで放映したことである。

これは残念ながら、サンプロという、いわゆる浄土宗がスポンサーになっている番組であり、比叡山のようなスポンサーつきでなくても、本宗が独自で行なうその英断をよろこびたい。成果はこれからであるので、問題は、各寺院がその視聴を、広く檀信徒にすすめていただきたいことである。

さらにテレフォン法話も、いよいよ普及してきた。

新しい布教への意欲がみられたように思うが、問題はつづけることであらう。

門主の交替といった重くらしい一年のなか、こうした教化施策への着眼によって、明日に向う教団としての方向づけがなされた年であったといえるだろう。

明年への新たな期待をかけて、思い出の一年の筆を擱く。



(一) (口) (法) (話)

念仏は釈尊出世の本懐

むら せ ひで お
村 瀬 秀 雄

武蔵の国の御家人津戸の三郎為守は、三十三歳の三月二十一日に法然上人の庵室を訪ねて念仏往生の教えを受けた。その後故郷に帰ってから尊願と号して熱心に念仏を唱えていたが、ある人が津戸の三郎は普通の仏道修行ができない者であるから、法然上人は念仏の行を勧めたのであると語っていた。これを聞いた為守は早速上人に教えを請うたところ、上人から詳しく念仏の教えを記した返書があった。

その返書の要旨は、第一に念仏往生の本願は広く人々を極楽往生させるために阿彌陀仏がおし給うた誓願であるということであった。従って学問のある者もない者も、罪がある者もない者も、善人であろうと悪人であろうと、持戒の人も破戒の人も、賢人も愚人も関係なく、念仏を唱えればすべての人が極楽往生できるのである。そして第二に常に心にかけて忘れず怠らずに、念仏を唱え続けてゆくことであった。たとえ身体が穢れている時でも、口が穢れている時でも、心だけは清く保って唱えることが大切であるということであった。こうして絶え間なく相續してゆくことが本當の念仏なのである。また最後に念仏以外の行を勤めている人や異った法門を信じ

ている人に向つて、無理やりに念仏を勧めてはならないと説いてあつた。

為守はそれからますます励んで念仏を唱えていた。すると近所の人々が自分も同じ信仰を持ちたいと望むようになり、武蔵の国に念仏の行人が三十余人を数えるまでになった。為守がこのことを上人に報告したところ、上人から返書があつたが、上人は其中で念仏の教えは釈尊にとつて出世の本懐であつたとして、次のように記してあつた。

「念仏往生の本願は阿弥陀仏が人々を区別しない平等の慈悲の上に立つておこし給うた誓願である。仏の心は慈悲を本体となし給うているのであつて、観經に仏の心は人々を救わずにいられないという大慈悲心であると説かれてゐる通りである。善導大師はこの一句を、仏は人々を区別しない平等の慈悲心によつて遍く一切の人々を救ひ給うのであると説いてゐる。大師が一切の人といつてゐるのは、広くすべての人々を含んでいて洩れる者は一人もいないということである。しかも念仏往生の願は阿弥陀仏が仏になり給うために成就した誓願である。仏道修行にはその他にいろいろな行があるが、何れ

も仏になつてから説き給うた教えである。釈尊がこの世に現われ給うたのは阿弥陀仏の本願を説いて、念仏の行を勧めようとするみ心からであつた。このように念仏は阿弥陀仏がすべての人々を救うためにたて給うた本願の行であり、釈尊にとつては念仏の教えを説くことが出世の本懐であつた」

上人がこのように説いたのも、善導大師の教えを受け継いだものであつた。大師は次のように説いてゐる。

「釈尊は極樂往生の法門を説いて、人々に往生を願うことを勧め給ひ、阿弥陀仏は凡夫の命終に來迎して極樂淨土に導き給う。二尊の教えを知つた者は欣求淨土の心を起さずにはいられない。心を勵まし努めて仏法を仰ぎ奉り、念仏を唱えれば穢れた身命を終えた後には極樂淨土に往生できる。往生してから永遠の快樂を受けることは、生涯を通じての願ひである」

この大師の言葉は、釈尊が凡夫といへども念仏を唱えて往生できるという教えを明かし給うたことこそ、釈尊出世の本懐であるということである。この大師の趣旨をわが國に初めて顯正したのが法然上人であつた。

晩秋の観音巡礼



江目達雄
ごうのめ たつ ゆう

(山形市迎接寺住職)

十月の下旬、置賜三十三所観音の霊場をめぐった。同行十二人ばかり。晩秋の置賜盆地は、もう取り入れも終り、山野は紅葉のさかりであった。日程は三日間、毎日、よく晴れた。朝は霧がたちこめ、日中は青空がひろがった。紅葉は、きときわ鮮かであった。

山形地方は、最上川の流れに沿うて、内陸部に置賜、村山、最上の盆地がひらけ、日本海に面して庄内平野と

なる。それぞれの地域に三十三所観音の霊場がある。置賜、最上(村山、最上)、庄内の札所である。このうち、最上三十三所観音はよく知られており、関東方面や、近年は関西あたりからも、巡礼が訪れている。早春、雪解けとともに、巡礼の鈴の音がひびくのである。

最上の札所にくらべ、庄内や置賜は、まだあまり知られていない。殊に置賜の札所は、訪れる人も少ない。そ

れだけ、心静かな観音巡礼を、旅することができるようである。

置賜盆地の西北に位置する白鷹町は、三方に山が迫った山峡のまちである。この観音の札所は、殆んどが山



—深山観音堂（白鷹町深山）—

手にあり、苔むした石段や、狭い山道を辿らなければならない。登りつめたとき、思いもかけぬ立派な堂宇があるのに、しばしばおどろく。いずれのお堂も、里の人たちにも守られ、修理の手も加えられている。

白鷹町鮎貝深山の、深山観音堂（国重文）も、老杉巨木の間の石段をのぼる。この観音堂の創建の年代はあきらかでないが、いまの堂宇の建立は、室町後期と推定されている。茅葺き、宝形造り、古風な阿弥陀堂様式である。深山は、会津仏教と羽黒修験の交流する交通上の要路であったというが、この草深い山の中に誰によってこ



—深山観音への道—

の気品漂う重厚なお堂が、建造されたのであろうか。

深山の部落は、手漉きの「深山和紙」の伝統を、いまもうけついでいる。その和紙を求めようと、参道の中ほどにある別当の宅に立寄り案内を乞うたが、玄関の戸は開け放たれているのに、家の中は森閑として、人の気配もなかった。

飯豊町中の、中村観音堂（県指定文化財）にいたるゆるやかな坂道は、紅葉が散り敷いていた。この観音堂は、飛騨工が一夜にして造りあげたという伝えも、残っている。三間四方の宝形造り、室町期の様式をしめし、応永二十一年に再建したことが、確かられている。本尊聖観音像は、固く閉された扉の中にあつて、拝観することはできなかったが、ひの木の一木造りで、藤原期の造頭という。

飯豊町は、置賜盆地の中でも、殊に多雪の地帯である。豪雪の山の中に、幾百年もの間、この観音堂は、信仰あつい素朴な人たちによって、守りつがれてきたのである。

置賜三十三所観音のうちどめ、米沢市浅川の戸塚山観音堂は、胸をつくような急な石段の上の、杉の木立の中にあつた。私たちの参詣に気付いた住職が、いそいでお堂の扉を開いてくれた。徳一大師御作と伝えられる御本尊は、秘伝としてお厨子の中であつたが、前仏の青銅観音立像は、端正なお姿であつた。

この戸塚山観音の泉養院は、大同元年、徳一大師の開基といわれている。県内ではもう一ヶ寺、亀岡文殊で知られる高鼻町の大聖寺も、徳一大師の開創とされる。

徳一大師は、平安初期の高僧。伝教大師最澄と、所謂三一論争を展開した法相宗の碩学である。伝教大師が、法華一乗の思想にもとずき、一性成仏を説くのに對して、徳一大師は法相の立場から、五性各別、三乘真実一乘方便とこれに反論した。即ち伝教大師は、人間は誰でも成仏できると説き、徳一大師は人間には本質的な差異があり、それはいかんともなしがたいと主張する。

徳一大師はいづこの生れか、出生については明らかでないようである。「本朝高僧伝」は、惠美の大匠仲麻呂の子で、興福寺の学僧修円について法相の本旨を学び、

のち東大寺にあって法相を講じた。才識衆に優れ、理について抗する者はなかった。資性真率にして憚るところなかったが、たまたま朝議に反して、東国に移された、とある。



—戸塚山観音（米沢市浅川）—

東国移住について、あるいは、奈良仏教の奢侈墮落をきらい、真の仏道を求めて自ら東国に移ったともいう。

東国に入った徳一大師は、筑波山中禪寺を開創し、ついで石城に移って諸寺を開き、さらに会津に恵日寺、勝常寺などを、創建したといわれている。

入滅の年代も不明であるが、恵日寺に徳一大師廟のあることから、恵日寺に於て入滅したと考えられ、その年次は、天長元年のころと推定されている。

磐梯山の南麓、磐梯町本寺は、且つては恵日寺の門前町であったという。ゆるやかな坂道を登ると、磐梯明神をかこむうっそうたる杉林につきあたる。ここが恵日寺の史跡である。徳一大師は、ここに草庵をひらき、会津一円の布教教化の中心としたのであった。

恵日寺は栄え、その最盛期には、寺僧三百、僧兵数千、堂塔伽藍百を越える大寺となった。恵日寺の伽藍配置をしめす「永正古図」によっても、その規模の壮大さをうかがうことができる。

しかし恵日寺は、源平の争乱にあって平氏に味方し、その滅亡とともに衰運に向う。さらに応永の大火にあり、天正十一年には、伊達政宗の会津侵攻の兵火にかか

つて、堂塔伽藍は烏有に帰した。明治の神仏分離では、廃寺にさえなったが、のち許されて寺号復活し、現在に至っている。

徳一大師が、法相教学の立場から説く五性各別は、人間の性質の差別の思想のように思える。しかし徳一大師は、弊衣粗食に甘んじ、ひたすら道を求める高潔な学僧であり、また、薬師如来信仰の現世利益を説く、すぐれた教化者であった。その人格と精神、民衆の願いにこたえる薬師信仰が、恵日寺を中心とする会津仏教を興隆し、まだ未開であった東北に、仏教文化の夜明けをもたらしたのであったと思われる。

徳一大師の教線は、屏風のように時つ、吾妻の峻嶺を越えて、置賜盆地にも及んだのである。

観音巡礼の途すがら、白鷹町荒砥あらかの正念寺を訪ねた。延元元年開山の、浄土宗の古刹である。創建の当初は時宗一向派であった。

本尊阿弥陀如来像は、運慶の末孫大式法印の作、天正

十五年の造像銘がある。優美端麗な木彫の坐像である。

境内に高さ五メートル余りの石彫地藏尊をまつる。丈六地藏と呼ばれ、近郷近在の信仰をあつめており、毎年四月の例大祭は、まちをあげてのにぎわいになるという。

正念寺の墓地、芳賀与七家の塋域に、江戸時代中期の念仏行者無能上人と、無能寺の矢吹良慶和上の墓碑がある。これに関し、「荒砥町誌」(昭和二十九年刊)は、

「正念寺境内芳賀氏の塋域に、無能上人学運の碑があるのは、大和尚が本家(芳賀家のこと)六代目の息で、与七とは近い親戚関係にあるからである。即ち無能寺の法孫良慶和上が、常にその分骨を護持し、その没後これを芳賀氏に伝えたので、その遺骨を正念寺に埋葬し、一碑石を建てた」

と記し、芳賀氏の系図も記載している。

また良慶和上については、その墓碑銘に、

「和上諱は良慶、羽州村上の人、天保十年を以て誕



一恵日寺の徳一大師廟（福島県磐梯町）一

ず。（中略）明治七年擢んでられて無能寺を襲ぐ。明治二十六年、老を告げて鮎貝常光寺に隠す。同三十九年陰曆九月、微疾あり臨終を示めし、儀を行すること十四日、仏号を高唱し、泊然帰家す。齡六十八」

と記され、末尾には、「京都華頂門孝現有識」と刻されている。

宝州撰「無能上人行業記」（浄全一八）には、無能上人について、

「諱は学連、みづから守一無能と号し、出自は奥州石川郡（福島県）須金郷矢吹氏」

とあり、「荒砥町誌」とは異なる。

ともあれこの地の人々は、稀有の最勝人無能上人も、法孫良慶和土も、この地有縁の大徳と信じて追慕し、畏敬してやまないものである。

（正念寺住職須摩法樹師から、貴重な資料を賜わったことを記して感謝したい。）

浄土句集



夏東京 吉原登起子の蝶はなれもつれつ失せにけり

評 夏の蝶が離れたりもつれたりして、少ない花を追って飛んでいるが、何時の間にか見えなくなつて失せて仕舞つた。

天高し法主晋山稚児の列
福岡 林 澄山

評 大本山善導寺の晋山式は、秋日和を授け、新法主の列には稚児がつき、蕭々と菊の参道を練って行く。

念仏に今日がはじまる老の秋
群馬 島津 か寿

評 朝々のおつとめにお念仏申される。身

一田牛畝選
も心も清浄になつて一日中がすがしい。



木犀の香に送られて退院す
京都 岩井 伏水

評 入院されていた病院は木犀が香に包まれて日々が愉しかったにちがいない。然し色々なこと思いながら一日も早く退院を望まれたことでしょう。その香に送られて退院とは芽出たいことならん。

六歳の孫の手をひき富士登山
山口 上野 明達

評 元氣な孫をつれ富士登山とは孫も喜んでのことならん。そして祖父も嘸ぞかし達者で、幸福な爺孫である。

雲間より見えて千歳の秋東京 遠田 弘俊し

評 北海道へ飛行機で。雲間より見下ろす千歳の大平野、作物も稔り広々として嘸ぞかし爽快なことならん。

爽かに法主とならる樟の寺
福岡 荒牧 木魚

評 大本山善導寺には樹齡八百年の巨樟があつて有名である。この樟の大本山に新しい法主を迎えられた。この樟の如く元氣で長寿を願ひ御教化を願ひたい。

日向ぼこ坐睡しおわす御新法主
福岡 江上 樫村

墓々にお花線香秋彼岸
東京 新井 新生

百日紅さきざき今盛んなる念仏寺
福島 青柳 良巖

秋の宮毛檜稽古の男ぶり
福岡 高良 慈風

宵宮の苑に屋台の二つ三つ
福岡 安藤平次朗

早々と団扇の風を僧の背に
福岡 永江 隆説

葉の蔭に見落すほどの青蛙
東京 田中 秀代

秋涼し筑紫の人の新法主
大分 丹羽 難中

野より妻初氷告げにより
長野 友淵旋風子

地蔵尊梅雨に濡れつつ笑み給ふ
東京 末常てる子

さわやかに晋山式や善導寺
福岡 行正一如子

百日紅夕べの寺に灯がともる
福岡 服部 光代

朝詣静寂やぶる千木の鵬
福岡 上滝津弥音

丹精の鶯草一花風の中
東京 満尾衣有子

御詠歌を流しつお茶を摘んで居り
三重 森 静枝

野仏の山を背にして冬近し
東京 吉田ゆきえ

七夕の短冊をよぐ子の願
東京 猪瀬 幸子

本堂の廊下に魚板秋桜
福岡 荒牧 亀齡

吹かれつつ秋蝶沈む草の原
東京 細田 初枝

陸中路岩白き浜夏料理
東京 小笠原香祥

紅葉に菓子のをせある野点かな
山梨 青山富貴江

落葉焚く老の溜りの声高し
三重 山田 うた

十葉の小さく真白く咲く小径
東京 真野よし子

回向する僧に団扇の風送る
福井 深井 鉅士

盆の日の巴里はマリヤの昇天祭
福岡 原 敬二郎

客僧に新茶を僧の妻やさし
福岡 前田 秀峰
柏汁や嗜み師僧に似て来る 一田 牛畝

落葉の頃

木の^{きの}下^{した}隆^{りゅう}一^{いち}

(随筆家)

夜半、ふと目覚めると、風の音にまじってハラハラと何か降る音がする。雨か、と窓のカーテンを押し開いてみると、皓々と月が照っている。なんだ、落葉か——。この季節、何度となく、いや毎夜のようにこの音にだまされる。あしたは早く起きて、落葉を燃やさねば。そんなことを思いながら、今度は本当に深い眠りに落ちて、朝目を覚ますと、音も

無く時雨が屋根を濡らしていたりする。

伊豆の茅屋の、庭や門前の側溝にたまった落葉を燃やすのが、今年は台風の塩害で木々の痛みがひどく、九月の下旬から日課のようになっている。なにしろ雑木林の中に住んでいるのだから、その量は夥しい。朝風というのであるが、それも毎日というわけではないが、夜明け頃から限られた時間だけ風が止む時がある。まあそれも束の間、八時を過ぎると天城から風が吹きおりてくるから、落葉掻落葉焚の作業は、その間にやってしまわなければならぬのである。

ここに住まうまで四十年以上、市中に住むことが多かったので、焚火とは殆ど無縁であった。おぼろげな記憶を辿れば、冬の初め火鉢の薬灰を作るために米俵を燃やしたことがぐらいだろうか。それが子供には珍しくて、

追ひ追ひに子供集まる夕焚火
夕焚火寡黙なる子の顔照らす

と、近所の子等が集まって、何か厳肅な思いで燃えさかる焰に見入ったものだった。

焚火をしていると、自然に口をついて出てくるのが「たきび」という童謡であるが、私は戦後かなり経ってからこの歌を覚えたので、「みかんの花咲く丘」など一連の童謡ブームの頃の作品とばかり思っていたら、昭和十六年十二月「NHK子供テキスト」で発表されたものだということを知って驚いたことがある。昭和十六年十二月といえば、太平洋戦争が始った時である。「NHK子供テキスト」が番組の名前だか雑誌の名前だか識る由もないが、当時は時局に流されて我々の耳に届かなかったのであらう。しかし、なんとも心やさしい歌であるから、ご存知の方も多いことと思う。「たきび」の二番に、

ささんか、ささんか、

さいたみち、

たきびだ、たきびだ、

おちばたき、

「あたらうか。」

「あたらうよ。」

しもやけ、おててが

もう、かゆい。

とあるが、昔の子供は冬は大抵霜焼に悩まされたものだった。近頃とんとこの言葉を聞かないのは、子供たちの栄養状態がよくなったせいかと思う。霜焼も死語となって、冬の季題から消える日も近いのではあるまいか。

落葉を掻き、落葉を燃やしながら、とりとめもなく、いろいろなことが頭に浮かぶ。

「老父と孫」と題して、

落葉焚くたった一人の孫と居て

孫落葉掻くともなしに傍に居り

落葉掻孫の熊手は縁起物

他数句を作ったのは、昭和四十四年の夏から秋にかけて、何度目かの肝炎で入院していた時、ヨチヨチ歩きをしていた頃のひろみと父を回想したものである。この年の秋の句には、なぜかかなしい句が多い。

この秋はかなしき句のみ作りたる

とまで記している。翌年元日に父が、九月の末には母が他界した、そんな予感があったのかも知れない。と、ここまで書いて、急にアメリカのひろみに電話したくなった。

あつというまに黄葉し落葉してしまふ、インディアナの季候が知りたくなったのだと言うと、

「木の葉はすっかり落ちてしまつて、キャンパスの栗鼠は冬に備えて、頬っぺをふくらませてます。時には暖かい日もあるけど……」

「インディアンサマーってやつだな」

「ええ。キャンパスに落ちてるリンゴや栗を拾って帰って焼いて食べたら、おいしかったわ」

「栗鼠の上前をはねたわけか……。じゃあ元気でな」

「それだけ？」

「うん、ちょっと声を聞きたかっただけだ」

今日も一日風が強い。家の角の路上で、絶えず落葉が風に舞っている。

胡旋舞と落葉の舞を見て居たり

胡旋舞——唐の文化の最盛期、玄宗皇帝の御代、都長安で西域の美女が盛んに舞ったという、テンポの速い舞踏はこんなものではなかったかと、ふと思つてしまふ。美女に限らず、玄宗に叛いた安祿山は肥太漢であつたにも拘らず、胡旋舞の名手であつたという。彼と同じように、胡旋の血を引く男の中には多くの名手がいたに違いない。名手でなければ部族のリーダーになれなかったのでは……。そんなことも考えてしまふ。だが、その舞踏がどんなものであつたか、いま知る人は無い。僅かに敦煌千仏洞の壁に、胡旋舞を舞う美女の姿が残されているだけである。

明日はまた早起きして、落葉を燃やさなければなるまい。

落葉焚日課となれば疎しく

などと、泣言は言っていられないのである。



後鳥羽院と御製『無常講式』(四)

たから だ まさ みち
宝田正道

(浄土宗出版室長)

四、御製『無常講式』と側近

さて、「隠岐にはあさましの年のつもりやと、御齡にそへても、尽きせぬ御敷きぐさのみしげりそふ」謫居生活も、いつしか十五年を経過する。この間、『後鳥羽院御自歌合』や『遠島御百首』などの御撰があり、先に挙げた「われこそは新島守よおきの海の荒き浪風こころして吹け」の他にも、

○軒は荒れて誰かみなせの秋の月すみこしままの色はかはらじ
○すてやらぬ憂き身の果ての悲しさよ嘆きながらもなほ過すかな

など、望郷と絶望の心を訴える和歌も多い。嘉禎二年(一二三六)には、『遠島御歌合』や『新古今和歌集』改訂本さえ「身づからえらび定めて」「集のやつれ」(隠岐本跋)を正されたが、胸中は愛息の想い出と回向心に揺れていたに違いない。

長い年月の間には、「蛙鳴く刈田の池の夕たたみ聞かましものは松風の音」と詠んで静寂を愛しつつ、春になれば「百首鳥さえずる空は変らねど我が身のはるぞあらたまりゆく」、夏がくれば「けふとてや大宮人は替ぬらんむかしながらの夏衣かな」と詠い、「なきまざる我涙にや色かはるもの思う宿の庭の

むら萩」と、もの悲しい秋に幾度衣の袖を絞られたことであろうか。

この文藻の豊かさが、老いゆく身に忍びよる絶望の淵に立たされた時、たちまち凝って現世の無常から浄土への憧憬へと展開する。こうしてついに『無常講式』一巻の誕生となるのである。

本書は、建長元年（一二四九）七月、雲林院で写されたものしか残っていないが、「隠岐法皇御筆」とあるから、恐らく崩御近くになって側近の誰かが写しておいたものを、再び転写したに違いない。ただ、疑問の点は、典書の「建長元年七月十三日於雲林院書写了」までの間に若干の余白があり、そこに「正月九日 帝王崩御同月廿日」という同筆の十二文字が書かれている謎である。

院の崩御については、史書のいずれもが建應元年（一二三九）二月二十二日とすることによって一致しており、正月十八日から病にたおられたことも側近者の手記で明白である。した

がって、正月九日に崩御された帝王という意味は、院より五代後の第八十七代四条天皇をさす以外に考えられない。すなわち、仁治三年（一二四二）正月九日（御年十二）がそれである。そして同月二十日は、次の後嵯峨天皇（土御門院第三宮）が迎えられて御年二十三歳で践祚あらせられた日なのである。この間「空位十二カ日」と記録にあるから、皇統連綿たる皇室のあり方としては、一刻も猶予できない、国政上重大な「時」であったことはいうまでもない。少し話が外れるが、この後嵯峨天皇（邦仁王）が皇位を継承するについては、ちょっとした問題があった。すなわち、亡くなった四条天皇は十二歳であったから、独身で、もちろん皇子はない。しかし、適当と思われる皇嗣は二人いた。一人は土御門院の皇子邦仁王、他の一人は順徳院の皇子忠成王である。どちらも後鳥羽院の孫である。朝廷としては、実力者九条道家と血縁のある後者を望んだが、自主的選択の能力を欠き、ま

ず幕府（執権北条泰時）の意向をうかがった。

幕府は、邦仁王を指名した。というのも、忠成王は佐渡に配流されている順徳院の子であるから、即位すれば院の帰京が実現し、再び承久の乱の二の舞を演ずる反幕の危惧があったからだという。もともと、実際には順徳院もその年九月に配所で崩御（四十六歳）されたから、幕府の思惑は杞憂にすぎなかったのであるが……。

さて話を元に戻そう。

以上を整理すると、仁治三年に「隠岐法皇御筆」の『無常講式』を転写した人が、その余白末尾に、関連記事として帝王（四条）の死と後嵯峨天皇践祚以下、重大な出来事（同年七月、顕徳院から後鳥羽院に改名、九月順徳院崩御など）の想い出を書き添えておこうとして、途中で止めたか、あるいは以下が散逸したか、なんらかの都合で尻切れトンぼになってしまった。それをそのまま建長の書写者が忠実に伝えたものと考えられる。仁治三年と

いう年号を入れずに、いきなり正月九日と書き出してある点から見てその年の重要記録をメモとして書き残そうと企てた書写者のいたことが匂うのである。

要するに、現在国宝として伝わる仁和寺蔵『無常講式』は、院の側近によって崩御後まもなく宸筆本が写され（隠岐法皇御筆と書き加える）、ついでそれが仁治三年に再び転写されたが、この時、「正月九日」云々の書き込みが行われた。それを建長になって、そのまま写されたのが、今日まで伝えられたのではないか、と推測する。道理で、随所に誤写と思われる文字や脱字が見受けられるのも、両三度転写の間のさかしらと考えれば、またやむをえないところである。

それはとにかく、「花の色鳥の声にも慰まざうき世をさとの仮りの宿りは」の歎息から「西へ行く心の月のしるべあれどまだ晴れやらぬ雲ぞ悲しき」の苦境に進んだ目覚めの心が、十数年、やがてこの一卷に結晶した、と

見てもいいのである。

題は「無常講式」であるが、普通一般に當時行われたような、道場、次第法則などの形式をとらず、ただ無常を觀じ穢土を厭い、もっぱら弥陀を念ずる一途な信仰を、美辭麗句で綴った告白文学というべきであろう。

全三段、最初の一段は世の無常を説いて厭離の念を勧め、第二段で死の実相を明かして夢幻泡影如露如電の形体を諦觀されている。そして第三段で自らの過去の榮華と今の流刑の身を比べながら、憑むべきは弥陀一仏であることを強調され、区切りごとに「南無阿彌陀仏」と称えられている。一部を引用してみると（原漢文）、「五道六号の苦を厭（いと）うべきは、安養の淨利、前仏後仏の間に生れて、憑（たも）むべきは、弥陀の悲願なり」と悟り、「今生また富貴の間なり。貧賤の時、誰か随わん」と述懐されて「今、面のあたり乱世を見るに、実に仏より外に誰をか憑むべき」と述べるあたり、まことに実感そのものである。

る。「昔は清涼紫雲の金の扉、菜女腕を並べて玉の簾を巻き、今は民燼蓬蒿の葦の軒に、海人鉤を垂き僅かに語らいを成す」というのも、天国から地獄へおちた帝王自身の環境の激変を物語る悲運の体験談に他ならない。

かくて院は、安然と最期を迎えられた。

延応元年（一二三九）二月二十二日、宝算六十をもって隠岐行宮に崩御されると、同二十五日、同島源福寺の裏山で火葬にし、四月、西蓮は遺骨を奉じて出雲に渡る。そして五月十五日、大原西林院に納めて顯徳院と称したが、仁治二年（一二四一）大原法華堂にこれを遷し、翌年七月、後鳥羽院と改名したのである。前記四条帝崩御の年である。

ここで一つ、院に供奉した側近をめぐる不思議な因縁譚を披露しておこう。

前にも列挙したように、院のお供をして隠岐に随行、十九年間、その最期まで奉仕した側近者の中に、伊賀局（白拍子亀菊）の名があったことを憶い出していたきたい。

彼女は、入道して尼となり法名帰本を名乗っていたが、院の崩御後は西蓮らとともに京へ帰り、延応元年三月二十二日、つまり院の初月忌に自ら『東寺御舍利相伝次第』（広隆寺蔵）という短い記録を綴っている。恐らく院の遺物の若干とともに広隆寺に寄進した文書の一つと見られるが、その記事に、次のようなことが書かれている。

建保四年（一二六）正月、東寺の宝蔵から御舍利を盗んだ大夫房という盗人を、藤原秀能が搦めとり無事これを取り戻したところ、院は御舍利を元の宝蔵に返納するとともに、褒賞として十粒を秀能に与えられた。その後承久の乱で隠岐へ遠行されたが、ご在生の間所持されていたのは一千余粒に上るといふ。延応元年正月十八日から病に仆れ、くだんの御舍利や浄土三部経、定朝作阿弥陀三尊などを形見とし、年来の師であった了貴房という上人に院宣をもって送り遣わされたが、帰本にも一部ご下賜になった、というのである。

ここにいう秀能という人は、院の信任も厚かった歌人であるが、承久の乱後、熊野で出家して如願と称し、仁治元年（一二四〇）五月、五十七歳で亡くなっている。

ところが、建永の法難で法然配流の直接原因をなした、いわゆる「鹿ヶ谷事件」で、宮中の女官を出家させたために六条河原で斬罪に処せられた安楽房蓮西という門弟がいるが、当時、その刑を執行した張本人は、この秀能であろうと思われる。院の逆鱗は「官人秀能におほせて、六条川原にして安楽を死罪におこなはる」（『勅修御伝』卷三十三）とあるから、同一人なのであろう。

もっとも中野正明君が「専修念仏者安楽房蓮西の処刑人」というテーマ（『印度仏教学研究』第三十巻第一号）で発表した論文によると、二尊院所蔵「七箇条制誡」の第三十二番目の署名者安蓮は、道光の『漢語灯録』に如願房と註記されているから「官人秀能とは、この如願房安蓮と見られる」という。だから「少

なくとも文献の上では、安楽房蓮西は同法者である安蓮によって斬首されたことになる」というのである。ただ、こう大胆に結論されると「如願房安蓮」は元久元年（一二〇四）の「七箇条制誡」当時すでに法然門下となっていながら、それから十七年後の承久三年（一二二二）以後、熊野山で再び出家（法名如願）したことをどう解釈したらいいか、疑問が残る。したがって安蓮と秀能とは同じ「如願」でも別人であったのではないかと私は思うのであるが……。

しかし、『尊卑分脈』によれば、能茂すなわち西蓮は、正しくこの秀能の次男で、文永五年（一二六八）七月十六日、六十四歳で卒したことになる。つまり、官人秀能を父とする能茂は、安楽房を処刑した父の罪障を償うために、出家して西蓮と号し、院の側近として隠岐にまで随行、子としてせめてもの孝養と追善を果そうとしたのではなからうか、とも考えられる。

さらに驚くべきことは、前記婦本ら供奉の官女についての噂である。

婦本は、白拍子亀菊として院の寵愛を受け、伊賀局として所領摂津国長江、倉橋両庄の地頭罷免をめぐる紛争を起した。それが承久の乱の起る遠因の一つとさえ伝えられるほどであるが、彼女はかの「鹿ヶ谷事件」で、なんと住蓮や安楽と密通したという疑いのもたれる女人なのである。

兼実の弟慈円は、その著『愚管抄』において、安楽、住蓮らの罪を女犯と決めつけその相手となった院の女官（法然伝では鈴虫、松虫などと呼ばれている）の中に「院ノ小御所ノ女房仁和寺ノ御ムロノ御母」がいたことを暴露している。兄の兼実が法然上人に帰依したのに反し、弟の彼は上人自身よりもむしろ門下たちの邪義や姪行を社会的害毒として糾弾したのである。赤松俊秀氏の研究（宮崎博士還暦記念『宗史の研究』所収「愚管抄の再検討」）によれば、右の「院ノ小御所ノ女房」こそ伊賀局

亀菊と確認できるという。ちなみに「御ムロノ御母」というのは、これも院との間に仁和寺光台院御室道助法親王や冷泉宮頼仁親王（児嶋宮）らを儲けた、内大臣正三位藤原信清の女で西の御方（坊門局）といわれている。一説によれば、この西の御方も供奉の一行に加わって隠岐まで随伴、ただし寛喜元年（一二二九）に帰京したと伝えられているのである。

以上の密接な人間関係を整理してみると、住蓮・安楽と「密通」した官女の亀菊や西の御方は、彼らを斬首した秀能の息子能茂とともに、わざわざ院の側近として揃って隠岐まで随伴したことになる。はたして自発的かどうか判らないが、不思議な因縁といえる。

宮中の女官が二人、六時礼讃の妙音に魅せられて住蓮・安楽の許へ駆け込み出家した、という浄土宗側の所伝とちがって、彼らの関係は「密通」であり、その相手が寵愛ただならぬ亀菊らであったとなると、院の逆鱗の程もさこそと推察できるではないか。

しかも、院は彼女らを追放離縁するどころか隠岐にまで随伴させ、本人たちもぬけぬけと最期まで側近に奉仕するのだから、男女間の愛の機微は不可解である。院が惚れすぎたため寛大で手離せなかったのか、亀菊らが前非を懺悔して罪滅しに遠所まで同伴を志願したのか、その点はさっぱりわからない。

ただ、亀菊についていえば、「鹿ヶ谷事件」は建永の頃（一二〇六）で、承久の乱（一二二一）と十五年の隔りがあるし、寺内大吉氏によると、白拍子あがりの「局」は、とかく「亀菊」を襲名させる例もあったらしいから、年代的にも隠岐へ行った亀菊は何代目かの別人だったのかもしれない。

ともあれ、怨念の懷郷から弥陀欣求にまで浄化され昇華された院の魂の結晶ともいえるべき『無常講式』は、前記建長の書写以後、浄土宗第三祖記主禪師門下望西楼了恵の『知恩伝』や、本願寺寛如の子存覚の『存覚法語』、さらに蓮如の「白骨の御文」などに引用され、

清淨華院鼻祖向阿証賢の『三部仮名抄』（父子相迎）にもこれを参照したらしい痕が見える。心ある人々によって秘かに読まれ、写伝していた様子がうかがえるのである。

この頃、都ではすでに聖覚、源智、聖光、明禪その他、法然面授の高弟たちや宜秋門院、藤原定家、北条泰時ら有縁の人々も相次いで鬼籍に入り、代りに一遍や了慧道光が生れ日蓮が出家するなど、次代を担う若い人々との世代の交替が明確に見え始めていた。

その中であって、老来なお、京洛西山（善峰）を依所として活躍していたのは善慧房証空であり、幸西や親鸞でもあった。また、孫弟子としては鎌倉を中心として遊説していた若き良忠らがいる。こうして、漸く興隆してきた道元の禅や日蓮、一遍らの活躍に対して、良忠並びにその門下六派の檜舞台に時代は移っていくのである。宮中への接近もようやく始まるが、浄土宗としては、なお寓宗的な世評に甘んじていなければならぬ一時的な

離伏期といえるかもしれない。

院の周辺の人々の動きとして、まず中宮の一人であった修明門院が、隆寛の弟子南無房智慶（鎌倉新長楽寺）に四十八か条の不審状（『浄土見聞集』下「称名問答」）を出しているのは注目に価する。

夫君に続いて愛児順徳院を佐渡の配所に失い（仁治三年）、さらに梶井宮尊快親王にまで四十三歳の若さで逝かれた（寛元四年）老母にとって、文永元年（一二六四）八月の臨終まで生き永らえることの悲嘆と辛苦は、想像に絶するものがある。

彼女は、右の不審状の中で、例えば、詩歌管絃に心を寄せ、文華風月に思いをかけようと、その閑々に遊芸を廃して一向に弥陀の名号を称える人と、五種正行の外の余行を隙なく繰り返しつゝ時々念仏する人と、どちらが弥陀の本願に叶い、善導の勧進に随順しているか、と問うている。これに対して、南無房は、もちろん、前者を勝とし後者を雑修雑

行ときめつけている。

宮廷生活の華美な遊びの中に老いゆく中宮の迷いが切実に出ていて、当時の殿上人一般に通ずる不安の実態を赤裸々に代弁している観がある。

ちなみに、寛元年中には、同じく後鳥羽院の皇子道寛親王(西山宮)が、父君の想い出に残る水無瀬蓮華寿院を西山に移し、善慧房証空を上首として十二人結衆の不断念仏を修している。また、その少し前、仁治元年には、大原の迎講の拠点西林院普賢堂において、教念上人所持の宸筆『後鳥羽院御口伝』が書写せられ、翌二年、院の遺骨は同じく法華堂に移された。一方、この頃、醍醐本や私日記など最初の法然伝も始め平経高らが在々所々四十八道場で四十八時念仏を修し、特に西山証空らの強調する観經華座觀想の仏事を行なうて、隠岐から帰京した、例の西の御方もそれに参加したりしている『平戸記』寛元三年二月二十五日条)など、西山派系統の念仏流布を

中心として在京教団の動向は、まだまだ解明しなければならぬ要素を含んでいる。しかし、残念ながらも紙数もつきたので、ここでは省かざるをえない。

法然上人滅後約三十年、後鳥羽院の悲運の生涯と、それにまつわる政治的、社会的動向並びに院の信仰の極致ともいべき御製『無常講式』をめぐる若干の觀察をしてきたが、いかに一天万乗の君といえど、無常觀の最後は結局弥陀一仏の称名に頼らざるを得なかったという、凡夫往生の一典型を目にした思いである。一方、念仏教団は種々の異解異流の中で、それぞれに分散しながら、やがて投げられる「念仏無間」の石や蒙古襲來のつづてに、宗祖への知恩にめざめ、祖伝祖語編纂事業という形で「浄土宗」統合への道を歩むようになるのである。後鳥羽院の『無常講式』は、そうした歴史の流れに漂う、極楽浄土行の悲しき一隻の扁舟であった、と見ることもできるのではないだろうか。

(了)



念佛ひじり三国志

(百三)

——法然をめぐる人々——

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

安楽房の独房で念仏を唱和することが許されて、それが四夜目であった。

「今夜が最後になるかもしれない」

髭むじらの獄吏が遠ざかると、安楽房はすぐにささやいた。

「最後か……」

処刑の執行が迫ったという情報を、安楽房はどこから入手したのであろうか。

「住蓮よ、おぬしはこの獄から連れ出されるぞ」「わしだけか」

住蓮は納得しきれぬ表情になった。

「じつは今日、秀能という男がやってきた」

法然伝が「官人秀能」と呼んだ男であろう。

秀能は「西面ノ武士」として後鳥羽院の寵愛が篤かった藤原秀康の実弟にあたる。秀能自身も和歌に秀でており、後鳥羽院の歌所へもしげしげと出入りした。この兄弟は河内、大和を領して国司となり、いわゆる近畿武士の中核であった。

近畿武士――

これは鎌倉で將軍頼朝が没し、京で後鳥羽院が政治權力を掌握すると共に膨張してきた新勢力である。武士ではあるが、関東の御家人とは厳然と一線を画している。院の直屬であった。それどころか彼らは鎌倉から赴任してきた鎌倉武士を次々に弄絡し、官位や領地を与えてこの近畿武士団へ組みこんだ。

將軍頼朝の妹婿だった一条能保は鎌倉の名代として在京していたが、彼の死後その子尊長僧都は「西面ノ武士」の組織化に努力して後鳥羽院直屬の推進者となった。

「西面ノ武士」が、東方の鎌倉を睨らんで坐る後鳥羽院に面従するという語源から発した称であることは、これまでに何度か指摘してきたとおりである。

尊長の兄で、一条家を継いだ信能は近畿武士団に加わり、配下の御家人の多くも頼朝と交替した鎌倉の北条執權に背を向けた。その動機に、後鳥羽院から領地莊園を分与されたり、検非違使の官位を与えられた事実が列挙できる。

藤原秀能らの兄弟が、那智ノ校校長殿と深く通じてい

たことは、領地関係からも当然で院政の独裁權力を大いに誇示できたのである。

ただしこの翌年、承元二年（二〇八）には熊谷蓮生房の「上品往生」というデモンストレーションもあり、これに続いて尼將軍北条政子が入京してきた。鎌倉武士が京の内外にあふれ、後鳥羽院もその暴走に歯止めをかけないわけにはいかなかった。鎌倉調伏を祈った最勝四天王院を取りこわしたりして、東西の間にいちおうの平和関係を保持し得たり、長敵の意志のままに行動したはずである。

これら近畿武士が、やがて承久ノ変となって暴発、鎌倉北条の大軍をむかえ撃つことになる。

この建永の法難時から承久ノ変までには十四年間ほどの日月がへだたっている。だからこの時点、ただちに近畿武士団が結束して北条執權へ敵対感情をいだいたとは思われない。だが、念仏じりたちの処刑で、結束への自信をつちかった事実も見逃せない。

その藤原秀能――官人、秀能が、安樂房の独房へ現れて、最後の説得にかかったというのである。

「それがだな。いきなり大津皇子の先例を話だした」

「大津皇子……」

住蓮はそんな故事に精通していなかった。

朱鳥元年（六八六）天武帝が崩御した。生前の帝は第三子の大津皇子を寵愛していた。皇后は帝位を継承する予定の草壁皇太子の将来を案じて、帝の死後わずか一カ月足らずで大津皇子は捕らえられた。彼の側近やブレーンだった僧侶ら三十数名も逮捕された。罪名は叛乱企図である。

大津皇子は逮捕の翌日、詔語田舎（おさだのいえ）で処刑された。二十四歳で、妃の山辺皇女は髪ふり乱して裸足のまま処刑場へ駆けこみ、夫のあとを追って死んだ。ところが皇子と共に逮捕された三十余人は殆んどが釈放、わずかに二名だけが流刑になったという。釈放されたばかりか、大半がそのまま官途に就いた。

「これが天子の道だと言うんだな。主謀者、それも直接新政権をうかがう大津皇子だけを処刑し、他の者はすべて許す」

「もともとその叛乱が捏造ではなかったのかな」

住蓮もせせら笑いたくなった。

幻の叛乱をデッチ上げて、実害をもたらず恐れのある

者だけを処刑し、他を許して「特赦の恩典」を押しつけてくる。

「われわれの事件もそれで、罪の浅いお前らを罰する気は毛頭ない、と秀能は言いつける」

「法然お上人さまが大津皇子で、わしらはその許される家臣どもと言うわけか」

「わしはあの秀能に少々入れ智恵をしてやったぞ」

「入れ智恵？」

「うむ。お前のことだ。住蓮という男は鎌倉武士どもから深い信頼を得ている。伊豆の走湯山に根をおろして、教化につとめてきたからだ。だから獄を出して自由の身にさせたら、きっと役に立つだろうとな」

「どんな役に立つと言うのだ」

「在京の鎌倉武士どもを上皇方へ寝返らせる工作にだ」

「そんなことをして何になる？」

住蓮には安楽房の意図が読み切れなかった。

「とにかくおぬしには一刻も早くこの獄を出してもらい、お上人さまの身を守ってもらう必要がある。幸わいおぬしには明白な罪科がない」

「明白な罪科がか……」

「その点、わしは駄目だ。この前も南都の衆徒ばらから弾劾されておるし、皇后との密事では助かりようがない。現にわしはこんな場所へ閉じこめられておる。おぬしの獄房は此処よりはマシであろうが」

「相棒が一人おる」

「そうじゃろう。小者扱いだ」

小者か、住蓮は苦笑した。

どうやら今、安楽房は罪をおのれ一身でかぶろうとしている。それが果たして得策であるかどうか。冷静に判断しなければなるまい。

密談を打ち切った。念仏を唱えることにすべてを集中した。

すべてを集中して念仏を唱え、思考から離脱して無心になったとき、ふっと冷静な判断が湧出してくることを、住蓮は長年にわたる念仏生活の体験で知っていたのである。

「もう夜が明けるぞ」

格子の外へ髭むじやらの獄吏が現れた。

獄吏が扉を開けている隙に、住蓮は短い言葉を投げつけた。

「おぬし一人で罪を背負いこもうとするのは、敵の畏へ落ちこむようなものだ」

「畏へ落ちこむとな」

しかし、それ以上説明を加えている余裕はなかった。獄吏に腕をとられ格子をくぐり脱けながら急いで言葉をおぎなった。

「おぬしだけが死のうとすれば、お上人さまも殺される」

二

おのれの獄房へ帰ると、じきに夜が明けた。殆んど一睡もしていなかったが、住蓮の頭脳は冴えきっていた。さつき無心から発した決断に、論理的な裏付けを組み立ててみた。

なぜ安楽房連西ひとりに罪をかぶせてはならないのか。彼だけを死地へおもむかせたら、師の法然も同じ道をたどらねばならない。それはなぜか。

罪科の核心を専修念仏の過激性だけに絞らせる結果になるからである。となると、首魁は法然自身ということに帰結してまう。安楽房の密通は、その過激性の一端、

ということとで処理され兼ねない。

あくまでも罪科は不義密通だ。後鳥羽院の怒りの感情に頼らねばならない。

那智ノ校校長殿や尊長僧都は、密通事件を軽く扱おうとする。彼らにとって女房どもの素行なぞ、どうでもよいのだ。ねらいは念仏集団そのものだった。政治的布石である。

だが後鳥羽院自身は違うであろう、と住蓮は現状を分析して断定したかった。

念仏集団よりも女房たちである。政治よりも自己のプライドの方が先行するはずだ。

現在では他の女性たちへ気持が散じて一顧だに与えようとはしない坊門局や亀菊なのだが、ひとたび自己が所有していた者を奪われたとなれば、耐え難い屈辱をおぼえるであろう。

それが専制君主の心情というものだ。まして後鳥羽院には独裁者の鋭角的な感情に、歌人という芸術家の気まぐれも付加されてくる。屈辱感に屈折して大局を見とおせなくなるであろう。

ここはどうしても不義密通を事件の主体に押し上げ

て、専修念仏への批判をかわさねばならない。

安楽房蓮西の性格は、やや軽はずみで独りよがりの面がある。おのれ一身を悲劇の主人公へまつりあげたいヒロイズムがある。

ここは何としても安楽房と同罪へおのれを堕さねばならぬ、と住蓮はあらためて決断した。二人がそろって不義密通をはたらいたのであれば、これは完全な風俗事件となる。師の法然が問われるのは、弟子の不行跡への罪だけであろう。

唯一つ、不安材料が住蓮に残った。それはあの亀菊が肯定するかどうかだった。〃賭けて〃みるしかない。

「住蓮さまは昨夜から全然おやすみになりませんね」
同房の若い明善房が何気ない口調で言った。

さすがに若い。拷問による傷もあらかた癒えて、隣人を観察する余裕が出てきたようである。

「眠るのが惜しいような気もする」

「なぜでしょうか」

「なぜかな？ あと幾らも生きておられないからかな」
「まさか……どんなにひどい拷問はしても殺すようなこととはないでしょう」

「そうかな。わしらを殺さないという保証があるか」
「わたしたちは仏に仕える身でございます。それを殺すなんて」

「それは昔の話だ。南都北嶺の僧兵どもを見よ。平然と殺し合っているではないか。彼らとても坊主の端くれであることはまぎれもない」

「ひどい話ですねえ」

明善房はおびえた眼つきになった。この左ノ獄へしよつ引かれてきて、言語に絶する拷問を受けながら、それでも明善房は殺されるとは思わなかったらしい。

「こわいか。死ぬのがこわいか」

「はい、こわいです。ほら、こんなにふるえているでしょう」

明善房は手をさしのべて、住蓮に握ってもらう。激しい上下動を示している。

「ひどいふるえようだ」

「変ですねえ。ついこの間、拷問を受けているときは、全然恐ろしいとは思わなかったのに」

「殺されるとは思わなかったからだろう」

「そうなんでしょうか」

「人間、生きる保証さえあれば、どんな苦しみにも耐えられる。ところが死なねばならぬことがわかると途端に苦痛が頭をもたげてくる。ただし、その苦痛は身体の痛みではない。心ぜんといに重くのしかかってくるものだ。弓杖や棍棒で打擲される痛みではない。形なき拷問だ」

「そのとおりでございます」

「だが、この拷問を受けている者は、獄に囚らわれたわしらだけではない。安穩に暮している人間ぜんたいが、じつはこの拷問を毎日受けているのだ。彼らは必ずいつかは死なねばならない道理に気づいてくるはずだ。だから念仏だ……明善房、そなたは向うの石牢で拷問を受けているとき、どうやってその苦痛をまぎらわそうとしたか」

「苦痛をまぎらわす方法ですか？ 無我夢中でした」

「そうではあるまい、泣き叫んだであろうが」

「泣き叫ぶ……ああ、最初のうちは歯を喰いしばって耐えていたんです。でも両腕を後ろで縛られ、腕の下に丸太をさしこまれ、きりきりと捻じあげられたとき、思わず泣き声を発しました。喰いしばっていた歯をひらい

て、叫びました。そうしたら、すこし痛みがやわらぐのです」

「そうだろう」

「苦しみに逆らうのは人間、自然の姿ではない。痛ければ泣き叫ぶことだ。それだけが苦を減ずる唯一つの方法だ。念仏を唱えるのは、それと同じ。生きることが苦しいから、死ぬことが恐ろしいから弥陀の名号を呼び続けるのだ」

「はい……」

「観無量寿経も下品下生のところで明示しているであろう。命終が迫って呼吸も苦しくなり、念仏することも出来なくなるときは、ただ一心に仏の名を呼べ、唱えよ、とな。この文における「念仏」とは、心に念じて弥陀のお姿を思いえがくあの念仏だ。称名念仏とは異なる」

「それで住蓮さまは、もはや死ぬことが恐ろしくなくなりましたか」

「ふざけたことを申すな。死をこわがらぬ人間なぞ、どこにもおらぬ。おったとしても、それはみんなニセモノ、虚勢を張っているだけだ。わしとて恐ろしい。恐ろしいから念仏を唱える。いや、おのれ一人で唱えている

だけでは心もとない。周囲の誰彼なく唱和させようとする。唱え続けているうちに、死が別物に見えてくる」

「別物に……」

「そうだ。お迎えた。阿弥陀さまがお迎えにきて下さった、これが死なんだ、と納得できるようになる。決して恐ろしい魔界へ引きずりこまれることはない」

あの南都、大仏殿の劫火の渦で見た住蓮の地獄相は、悲しい若き母親の死は、いま念仏の功がつもり、ようやく確固不拔の他力信心へと昇華しつつあるようであった。

いや、もう一つやっておくことがある。もう一人、と言いつ直した方がいい。その人物を念仏者の列へ加えるべく最大の努力を、最後の精進に励まねばならない、と住蓮はみずから言い聞かせていた。

その一人は、若く魅力ある女身――

三

左ノ獄での最後の時間になったその夜。住蓮は同室の明善房と念仏に励んだ。両人は声を合わせ朗々と名号を唱え続けた。

ふと気づくと、声がもう一つ混じり合っている。すぐ
間近から響いてくる。

格子の外にあの髭むじやらの獄吏がただずんで、おぼ
つかない手もとを合掌させて唱和しているではないか。
ひと区切りをつけたとき、住蓮は微笑を獄吏へ投げ
た。

「何でわしらの真似をする?」

「あんたが、それほど毎晩熱心にやっていることだ。き
つと良いことなんだろうと思つてな」

きわめて素朴な答えがかえつた。

「明善、これでいいのだ。念仏の理を熟知した者が唱え
る念仏も有難い。だがそれ以上で見様見真似、理にうと
い者の念仏は尊い。この人はな、わしら念仏者を不当な
邪法者として監視している獄吏なんだぞ。その人が一緒
に念仏を唱えてくれた」

獄吏は迷惑そうな顔をした。鐘鬼髭のなかで、意外と
可愛らしい小さな口を尖らせた。

「わしらはあんた方を、それほど悪者とは思つておら
ん。良いか悪いかをきめるのは、わしらではない。ただ
此処の番人をしているから、そういう顔をしているだけ

だ」

「わかる。お前の立場はよくわかる。立場や職だけでそ
の人間の品性まできめつけてしまうのが、この国の悪い
風習だ」

「なぜでしょう。どこからそんな風習は生じてきたので
しょうか」

明善房が訊いた。

「群郷百官の制度だな」

「群郷百官……」

「制法が確立すると、公卿役人がそれぞれの身分で縛ら
れる。一生その身分だけで生きるようになる。だから人
間の内容までが位階勲等だ。この人は一介の獄卒。彼の
上には刑部役人がおり、さらにその上には検非違使がい
る。上部へさかのぼってゆけば際限がない。そして天子
だ、院の上皇でゆきとまる」

「おい、あまり大声でしゃべるな」

さすがに獄吏はたしなめてきた。話の内容が内容だか
らである。

「その上限が神か仏なら良い。人間だから困るんだな。
意志や感情を持ち合わせてござる。いや、その意志や感

情はほんらいそれほど悪情のほうではない。天子や上皇に立身だとか野望は毫も必要ないからだ。ところが立身したい、野望を遂げたい、とねらっている連中が配下うじやうじやいる。彼らの甘言が天子や上皇を翻弄する」「念仏停止の沙汰もそんな立身や野望が目的で……」

明善房の眼は輝いた。獄に囚われるという屈辱感を一気に払拭してくれる言葉であった。

「まあ、そういうことだ。民衆がお上の命令に従わなくなった。なぜ世の中がうまく治まらないのか、とお上は考える。そのとき功をねらった臣が、それは世迷い言をまき散らしている専修念仏者どものせいです、と進言するわけだ」

たしかにこの建永二年前後、民衆の政治不信はどん底の状況であった。洛中に盗賊は横行し、それらを追って後鳥羽院みずから馬上から捕り物を指揮することに喜びをおぼえた。山上の衆徒は民家へ押し入って乱暴狼藉の限りを尽す。(建永元年九月。今津和邇浜にて)

後鳥羽院政の失政もだが、鎌倉武家政権の不安定な現状にも原因はあった。將軍頼朝の死後、内紛があいついでいた。源家が掌中にした西国の旧平家領でも統治の乱

れから武闘がくり返された。

そんな罅隙について京都の公卿たちが攪乱工策に躍りとなった。將軍頼朝の妹婿で、京都所司代だった一条家、その遺児たちが暗躍した。とりわけ出家したはずの尊長僧都が後鳥羽院に取り入って鎌倉の北条執権へ露骨な敵意をむけてきたことは、しばしば述べてきたとおりである。

住蓮が数人の武士によって左ノ獄から連れ出されたのは、獄吏までまじえてひとときの念仏会を持った翌朝のことであった。

獄の前庭には数頭の馬が用意されていた。

「馭れるか？」

武士の一人が住蓮に訊いた。

「馭れずば……」

「縄で縛りつけてやる」

馬でゆくからにはかなり遠いところへ。

あるいはその途次で斬られるのかもしれない。

鞍に両脚を、手綱で両手を嚴重にくくりつけられた。これでは容易に馬体から離脱することはできない。

馬首は東へめぐらされた。

「どこへゆく」

武士たちは黙りこくったままだった。住蓮を前後からおっとり囲こんで馬群は都大路を出てゆこうとする。

住蓮は路傍に人影をみとめると、その都度大声を發して、

「南無阿弥陀仏」

とびかけた。

姿かたちこそ囚人だが、おのれは専修念仏者だぞ、と誇示したかった。いやそれ以上に、ひと声だけでいい。馬上から往きずる未知の男女に念仏を伝えておきたかった。師の法然がつねづねくり返す「自分に与えられたメシ、半分は囚人に分けてやりなさい」という教えを忠実に実行したかったのである。

「おい、いちいちそうわめくな」

警固の一人が聞きとがめた。

「わめいているのではない。念仏をひろめている」

「道往く見知らぬ者に、睡でも吐きかけるようにやってとて何の効果がある」

「効果などあてにしてはおらぬ。わしにはそれをやる義務がある」

「なぜ？」

「いとお前らに斬られぬとも限らぬからな。最後まで正しい法を伝えるのが、仏の道に仕える者のつとめだからな」

「心配するな、それほど早くは斬らんわい」

ちよろりと武士は本音を洩らした。

「では、これから何処へゆくのだ」

「馬淵の里だ」

「馬淵……」

馬淵の里に何があるのだろうか。

住蓮は馬上であれこれと記憶をたぐり寄せてみる。

わずかに思いあたるのは、そこが旧平家領で平清盛がこれを比叡山へ寄進したということだけだった。いずれ延暦寺からの衆徒どもが待機していて、住蓮の到着を待つてなぶり殺しにでもするつもりなのである。

かたわらを、馬首を並べて歩む武士に探ぐりを入れてみる。

「馬淵の里には山門の大衆が待ちかまえているのか」

「山門の大衆？ いや、あそこには門跡御所である」

「門跡御所だと？ どの門跡か」

「青蓮院さまじゃ」

「そうか。青蓮院門跡の別所だったか。とすると……」

あとの余計なことは言わぬがよい。

青蓮院門跡の別所なら、そこにいるのは尊長僧都にまざれもなかった。わざわざ左ノ獄から連れ出して、そんな遠隔の地であらためて取調べるからには、尊長の意図はただの「暗殺」ではあるまいと察せられた。

逢坂山の峠道を馬群は越えてゆく。もう山路は春めいてきて、ちらほらと野花がひらきはじめた。のどかな眺めであった。背中也汗ばんでくる。

「どうだ、いい気分ではないか」

かたわらの武士に声をかける。

「そうだなあ、今年の冬も終ったようだ」

「思いきり声をあげて一緒に唱えようではないか」

「唱える？ 何を」

「念仏だ。南無阿弥陀仏と言ってみよ」

「め、めっそうもない。そんな真似をしたら。わしもおぬしともども縛り上げられるわ」

武士は警戒して住蓮との間に距離をおいた。

いい気味だった。住蓮は朗々と念仏をくり返し、それ

だけではこと足りなくなって、禁断の六時礼讃を朗唱しはじめた。

警固の武士たちは首をすくめて黙々とついてくるだけである。いくら制止しても口をつぐむような相手でないことはわかっている。

旅人たちは立ち止まってこの奇妙な一行を見送る。囚人らしい僧が馬上で音吐朗々うたいあげているのを、警固の者たちはただうなだれて聞き入る姿なのだ。いったいどちらが囚人なのであろうか。

(つづく)

△幼児用▽ 教育えほん

『ほうねんさま』

B5判、表紙共一二ページ (カラー刷)

定価三〇〇円 (送料実費)

申込先――

〒102 東京都千代田区飯田橋一―十二―六

大 道 社

待望の本格＜仏教＞歴史巨篇・毎日新聞社から刊行

《本誌連載中の大長篇歴史小説》

念仏ひじり三国志

——法然をめぐる人々——

寺内大吉著

現代によみがえる法然の時代——

直木賞作家が十年の歳月をかけて遂に完成

した法然像——

僧俗を問わず現代人必読の書!!

四六判・上製 全五巻

第一巻三六八ページ 予価二二〇〇円

絶賛好評発売中

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十八巻 十二月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十七年十一月二十五日 印刷

昭和五十七年十二月一日 発行

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関二三男

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇三 振替東京八一八二一八七番

昭和58年度版

浄土宝暦

予約発売開始!!

ふるってのお申込みを!!

◎法然上人鑽仰会が責任をもって編集している「浄土宝暦」。
昭和58年度版がまもなく刷了となります。年末年始の好便
な檀信徒用施本として、広くおすすめいたします。

B 6 判 総ページ数 40ページ

1 部単価 60円 (200ブ以上 55円)

送料実費 (400ブ以上はサービスします)

●なお、ご寺院名の印刷なども実費にておこないますのであら
かじめご連絡下さい。

できうるかぎりの便宜もおはからいいたしますので、多くの
方々からのご注文をお願いいたします。

お申込み

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

法然上人鑽仰会

(振替)東京8-82187